

# 過去と未来への想像力

## 終戦の日に考える

2021.8.15

この一年半、新型コロナウイルス対策として国民にさまざまな犠牲を強いてきた政府は、今なお、机上の数字合わせにまよつぱやこじし、現実を直視しようとしていない。そんな中、日本はロックダウンが法的に認められないので緩やかな要請しかできず、これ以上は打つ手がないとの言い訳が定着してしまった。だが、実際は「やめてはいけない」とだらびで、異常さが二コーナールという言葉に覆い隠されてしまっている。

しかも、その多くは「上からのお願い」である。まことに国会や地方議会を議論し、法令として定めたことではないものがほとんどだ。とりわけ行政が姑息なのは、飲食店に対する酒類提供禁止措置のように、もともと有する行政権限を活用して、従わざるを得ない状況に追い込んでいることである。権限がない大臣が、あるからと法を超えて制約を課しているとの疑義も残ったままだ。

かつてコロナに対し、公共料金の振り込み業務を委託する際、「有量」図書を除くことを求めたことがあった。青少年のためなど誰もが反対しつらいう理由付けで、市民の自由は簡単に失われていくものだ。同様にコロナ禍では、感染の抑制が錦の御旗に使われてきた。その結果、国が決めたことには有無を言わず従わせるという世の中になりつつある。

少し前から、政府を批判する人を「偏向している」とシール貼りするなどで、為政者にとって都合の悪い「異論」を、社会から締め出すことが始まっている。さらには、政治的であること自体が批判の対象にもなっている。これは自由な言論が認められない社会の一手前だ。

# 時代を読む



山田 健太

専修大学教授

# リーダーとの付き合い方

すでに多くの指摘があるように、こうした状況はかつての戦争に向かう時代と似ている。一方で決定的に違つのは、当時は「おかしい」と口に出す自由はなかったことだ。確かに大日本帝国憲法でも表現の自由は保障されていたものの、治安維持法などの戦時立法によってどうしよう自由は骨抜きになった。政府はいつでも勝手に、自由を制約できたのだ。しかし、いまは違つ。私たちは完全な言論の自由が保障されている。いつでも誰でもどこでも、NOと言えるのだ。

政府の無策を嘲り、路上飲みをするのも折角の一つではあるかもしれない。だが、これでは国の為政者は決してたじろがない。さらに巧妙にやりだすことを恐る。だから、八月十五日のきまつ、当時との違いに改めて思いをはせたい。市民一人ひとりが目の前の「おかしなこと」に異議申し立てをするのが大切だ。

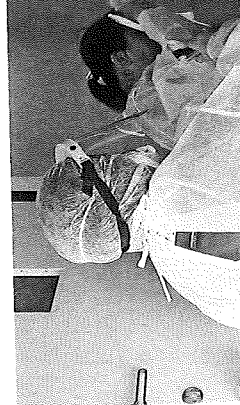
同時にその日から四半世紀にわたって、本土から切り離され無憲法時代が続いた地があることを忘れてはなるまい。その米軍施政下の沖縄を描いた「サシマ子モクシ」が全国上映中だが、魚屋のおぼあがサシマへの課税に対し、統治者アメリカに異議を申し立てたことが、復帰運動につながっていったさまが描かれている。

町内でも会社でも、国や自治体のリーダーに対しても、言われたことに爾々と従うだけが私たちの仕事ではない。自分を殺さず、しかちよつとした勇氣をもって、間違いをただすこともまた大切な役割だ。言わないとは消極的加担でしかない。行使をしないどころか、大切な言論の自由の使い方を忘れてしまいかねないからだ。

連載1500回を超えた朝刊4こま漫画「ねえ、びよちゃん」。4月には社会面からTKYO発面へ引越しましたが、変わららずご好評をいただいています。愛読しているフアンとして応援している。「毎朝、必ず見えてほっこりしている。愛読しているフアンとして応援している」(53歳主婦)、「びよちゃんをひこみこちゃんが出てくる場面が面白くてほほ笑ましい」(男)

「中等症も自宅療養」「コロナ入院 重症者」  
一行目は本紙、二行目

日付朝刊で、同じ内容の見た見出しです。主筆するが、病院側にするが、側の意図の違いで差が出る。新聞には記事の配置をしっかりと、紙面をしっかりと、専門の部署があり、東京室理部」と呼んでいます。重要性を読者の皆さんには、どんな見出しに



自宅療養する患者を診てもらうフェースシールドを看護師―神奈川

あ... 憶... 本... い... り... な... い...